

中高年齢期のひきこもりにある人々の生活困難についての量的研究

矢ヶ部 陽一
(尚綱大学短期大学部)

村上 義次
(福岡こども短期大学)

<要 旨>

2019（平成 31）年、わが国の中高年齢期（40 歳～64 歳）のひきこもりにある人々は 61.3 万人と推定された。もはやひきこもりは若年層のみではなく、中高年齢期を含む事象であるといえよう。本研究は、社会福祉的視点から中高年齢期のひきこもりである人々の生活困難の要因を明らかにするために、全国の生活困窮者自立支援相談機関とひきこもり地域支援センターを対象として質問紙調査を実施した。欠損値を除き、合計 138 機関（回収率 34%）、327 名（回答率 16%）より回答データが得られた。記述的統計と 1 要因分散分析の結果、中高年齢期のひきこもりの生活困難要因として「ひきこもり問題の性質」が作用しており、次いで「ひきこもり本人の生活困難」、「環境による生活困難」が作用していることが示唆された。

<キーワード>

中高年齢期のひきこもり、生活困難、量的分析

【はじめに】

1. 研究の背景と問題意識

2019（平成 31）年 3 月に発表された「生活状況に関する調査報告書」（内閣府 2019:11）によって、中高年齢期のひきこもりにある人々の推計が 61.3 万人と公表された。これまで 15 歳～39 歳のひきこもり状態についての調査（内閣府 2016:9-10）は実施されてきたが、今般はじめて全国的に 40 歳～64 歳のひきこもり状態についての調査が行われた結果の数値である。

従来、ひきこもりへの認識と理解は、不登校と関連がつよい青少年のメンタルヘルスの問題、もしくはニートや若者の自立と就労支援を課題として社会問題として語られてきた傾向がある（関水 2016:234-240）。しかしながら、ひきこもり概念が提起されて約 30 年間で過ぎた現在、わが国においてひきこもり状態の長期化、中高年齢期に

至ってからのひきこもり状態への移行、本人を含む家族の高齢化等が新たな社会的問題となってきた。もはやひきこもりは若年層のみではなく、中高年齢期を含めた認識や支援のあり方が問われているであろう。

本研究は実践レベルでは問題視されてきたが、制度・政策的には結果的に後置されてきたといえる中高年齢期のひきこもりの実態と課題について社会福祉学的な観点より分析を試みる。

2. 研究の目的

中高年齢期のひきこもりにある人々の支援に携わる専門職に対する質問紙調査をとおして、量的な側面から中高年齢期のひきこもりにある人々の生活困難要因の分析を試みる。

社会関係の不備や不調和等が何らかの背景要

因によって形成されるという生活困難の概念（岡村 1983:68-92）¹⁾ から、中高年齢期のひきこもりにある人々の複合化した要因の可視化を目指す。

3. 用語の操作的定義

本稿においては、「中高年齢期のひきこもり」の操作的定義として、「40歳～64歳であり（内閣府 2019: 2）、様々な要因の結果として社会参加を回避し、原則的には6ヵ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態（齊藤ら 2010: 6）」とした²⁾。ただし、調査回答者がひきこもり期間が6ヵ月未満であっても、ひきこもり経験があると判断すればひきこもりとしている。

4. ひきこもり認識の基本的視点

本稿では、ひきこもり認識の分析視点として、斎藤（1998:97-108）による包括的にひきこもりを捉える理論枠組みを用いている。同氏は「社会的ひきこもり」という言葉を提出し、わが国のひきこもり論においてシステムとしてのひきこもり理解を先駆的に提示した。

図1は健全なシステムを表し、「個人」、「家族」、「社会」というそれぞれのシステムが健全にはたらいっているモデルである。3つのシステムは相互に接して循環しており、しかも互いの境界も保たれている。それに比して、図2のひきこもりシステム模式図はこの3つのシステムの接点が全く乖離し機能していないことを表し、相互に交わらず運動することもない。システム間相互に力は働くが、力を加えられたシステム内部で、力はストレスに変換されてしまいストレスは悪循環を助長していることを意味している³⁾。

このように、ひきこもり事象は様々な要因が錯

綜した結果であり、「個人」、「家族」、「社会」の3つのシステムの不備によってひきこもり状態が固定化していくメカニズムが存在することを明らかにした。

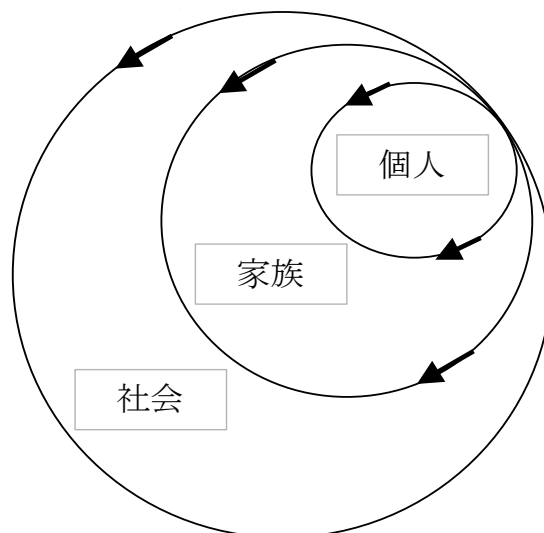


図1 健全なシステムモデル

出典：斎藤環（1998）『社会的ひきこもり 終わらない思春期』PHP 新書, 101.

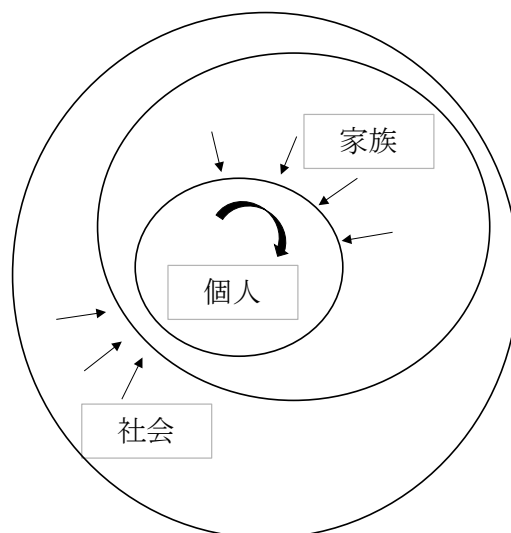


図2 ひきこもりシステム模式図

出典：斎藤環（1998）『社会的ひきこもり 終わらない思春期』PHP 新書, 101.

中高年齢期のひきこもりを調査対象とする本稿では、本認識モデルが最も適切にひきこもり事

象を包括的に捉える先行研究と考へ、基本的な分析視点として援用した。

【研究方法】

1. 調査の対象

質問紙調査の対象は、制度的に厚生労働省が規定し⁴⁾、ひきこもりにある人々に対する支援の中核機関である生活困窮者自立支援相談機関（市町村圏域）とひきこもり地域支援センター（都道府県圏域）とした。

2. 調査方法

単純無作為抽出にて全国の生活困窮者自立支援相談機関329カ所（全国総数1,316の4分の1の329カ所）所属の相談員（ソーシャルワーカー）等（1機関平均5名程の質問紙配布、合計1,645名分）を抽出した。また、ひきこもり地域支援センター75カ所（全国全数）に配置されているひきこもり支援コーディネーター（1機関平均5名程の質問紙配布、375名分）を調査対象とした。

質問紙送付は合計404カ所の機関、2,020名分（1機関平均5名程配布）であった。その結果、138カ所（34%）、399名（20%）より回答を得た。欠損値の処理を行い、最終的に有効回答としては327名（16%）とした。

3. 質問項目

質問項目は、回答者の性別、年齢や職種等を尋ねるフェースシートに加え、生活困難については26の質問項目を設けた。ひきこもりの基本的認識としては、システムの認識（斎藤1998:97-108）に依拠しつつ、生活問題については内外の先行研究を渉猟した平塚（2002:30）を基本的な質問項目の内容として参考にした。

それに加え、中高年齢期のひきこもりについての主要調査（横浜市 2018:17-22、全国ひきこもり家族会連合会 2017:13-14）とそれら調査を含めたレビュー（矢ヶ部 2019:64-69）、そして事例研究の知見（矢ヶ部・滝口2020:1-7）を参照した。また、内容的妥当性を図るため、ひきこもり支援の経験があるソーシャルワーカー10名による質問項目の検討、さらにひきこもり支援機関に所属する支援員10名にプレテストを実施した。

以上のような先行研究レビューとプレテスト等による妥当性の検討により、最終的には中高年齢期のひきこもりに伴う生活困難として「ひきこもり本人」、「家族」、「周囲の環境」、「ひきこもり問題の性質」という4側面を設定し、表1（本稿最終頁）のとおり生活困難を測る26の質問項目を作成した。各質問項目は、「全くあてはまらない」（1点）から「とてもあてはまる」（4点）の4段階スケールとして生活困難が大きい程に高得点となるように配点した（逆転項目が2項目）。

本稿では、主に生活困難を測る26の質問項目の記述統計、またシステムの認識である本人、家族、周囲の環境、そして独自に設定したひきこもり問題の性質という4つの下位尺度の量的関係について報告する。

4. 分析方法

統計解析にあたっては、IBM SPSS27 Statistiscs Base を用いた。また、1要因分散分析においては、Anova 4 を利用した。

また、有意水準は5%未満とした。

5. 倫理的配慮

本研究では、日本社会福祉学会の研究倫理指針

を遵守している。なお質問紙調査にあたっては、西九州大学倫理委員会の承認審査を得た（承認番号 19KFM32）。

【結果】

1. 調査対象者の基本的属性

質問紙調査対象者の基本的属性は、以下の表 2 のとおりであった。女性の割合が 62.4%であり、年齢は 40 代が 33.6%と割合が高かった。また、職種は相談員が 75.2%であった（複数回答）。

表 2 調査対象者の基本的属性 (N=327)

| | カテゴリー | 度数 (%) |
|--------|-------|------------|
| 性別 | 男性 | 123 (37.6) |
| | 女性 | 204 (62.4) |
| 年齢 | 20代 | 23 (7.0) |
| | 30代 | 69 (21.1) |
| | 40代 | 110 (33.6) |
| | 50代 | 70 (21.4) |
| | 60代以上 | 55 (16.8) |
| 〔複数回答〕 | | |
| 職種 | 相談員 | 246 (75.2) |
| | 就労支援員 | 42 (12.8) |
| | 心理士 | 26 (8.0) |
| | その他 | 25 (8.0) |
| | 無回答 | 2 (0.6) |

※複数回答は、回答総数と一致しない

2. 質問項目の記述統計量

生活困難を測る 26 の質問項目の回答分布は、本稿最終頁の表 1 の結果となった（質問項目 12 と 14 は逆転項目）。

(1) ひきこもり本人の生活困難

ひきこもり本人についての質問項目において

は、質問項目 4「他者関係の困難」の平均値 3.60、質問項目 5「コミュニケーションの不器用さ」の平均値 3.66 が高かった。下位尺度「ひきこもり本人の生活困難」の平均値は 3.22 であった（表 3）。

また、ひきこもり本人の質問項目群について対応ありの 1 要因分散分析を実施した。結果は、 $F(10, 3260)=68.54, p<.001$ にて有意であった（表 4）。

表 3 ひきこもり本人についての質問項目

(N=327)

| ひきこもり本人についての質問項目 | 平均値 | 標準偏差 |
|-----------------------|------|------|
| 質問項目 1 気分感情の困難 | 3.17 | 0.70 |
| 質問項目 2 体調維持の困難 | 2.89 | 0.75 |
| 質問項目 3 家族関係の困難 | 3.39 | 0.72 |
| 質問項目 4 他者関係の困難 | 3.60 | 0.61 |
| 質問項目 5 コミュニケーションの不器用さ | 3.66 | 0.53 |
| 質問項目 6 学校における挫折 | 3.23 | 0.70 |
| 質問項目 7 職場における挫折 | 3.41 | 0.66 |
| 質問項目 8 居場所がない感覚 | 2.87 | 0.73 |
| 質問項目 9 変化を避ける気持ち | 2.80 | 0.73 |
| 質問項目 10 漠然とした不安感 | 3.20 | 0.70 |
| 質問項目 11 自己決定の難しさ | 3.18 | 0.71 |
| 下位尺度 ひきこもり本人の生活困難 | 3.22 | 0.35 |

表 4 ひきこもり本人群の 1 要因分散分析

| Source | SS | df | MS | F | p |
|----------|---------|------|------|-------|-------|
| ひきこもり本人群 | 265.46 | 10 | 1.33 | 68.54 | 0.000 |
| 誤差 | 1262.54 | 3260 | 0.39 | | |
| 全体 | 1961.12 | 3596 | | | |

(2) 家族の生活困難

家族についての質問項目においては、質問項目 15「経済的な困難」の平均値 2.88、質問項目 16「家族自身の孤立」の平均値 2.74 が高かった。しかし、下位尺度「家族の生活困難」の平均値 2.54 は、他の下位項目より相対的に低かった（表 5）。

また、家族の質問項目群について対応ありの 1 要因分散分析を実施した。結果は、 $F(4, 1304)=$

64.94, $p < .001$ にて有意であった (表6)。

表5 家族についての質問項目 (N=327)

| 家族についての質問項目 | 平均値 | 標準偏差 |
|-----------------------|------|------|
| 質問項目12 ひきこもることへの理解がない | 2.61 | 0.68 |
| 質問項目13 暴力等での本人への萎縮 | 2.31 | 0.88 |
| 質問項目14 支援者への協力がいない | 2.14 | 0.65 |
| 質問項目15 経済的な困難 | 2.88 | 0.74 |
| 質問項目16 家族自身の孤立 | 2.74 | 0.72 |
| 下位尺度 家族の生活困難 | 2.54 | 0.41 |

表6 家族群の1要因分散分析

| Source | SS | df | MS | F | p |
|--------|---------|------|-------|-------|-------|
| 家族群 | 122.93 | 4 | 30.73 | 64.94 | 0.000 |
| 誤差 | 617.07 | 1304 | 0.47 | | |
| 全体 | 1016.58 | 1634 | | | |

(3) 周囲の環境による生活困難

周囲の環境についての質問項目においては、質問項目22「居場所支援の資源不足」の平均値3.34、質問項目23「就労支援の資源不足」の平均値3.32が高かった。下位尺度「環境による生活困難」の平均値は2.97であった(表7)。

また、周囲の環境の質問項目群について対応ありの1要因分散分析を実施した。結果は、 $F(6, 1956) = 83.69$, $p < .001$ にて有意であった(表8)。

表7 周囲の環境についての質問項目 (N=327)

| 周囲の環境についての質問項目 | 平均値 | 標準偏差 |
|-----------------------|------|------|
| 質問項目17 支援機関への不信任 | 2.60 | 0.68 |
| 質問項目18 支援機関のひきこもり理解不足 | 2.63 | 0.69 |
| 質問項目19 支援機関相互の連携の難しさ | 2.74 | 0.72 |
| 質問項目20 アウトリーチ支援の不足 | 3.12 | 0.74 |
| 質問項目21 医療機関等の治療資源の不足 | 3.01 | 0.79 |
| 質問項目22 居場所支援の資源不足 | 3.34 | 0.71 |
| 質問項目23 就労支援の資源不足 | 3.32 | 0.75 |
| 下位尺度 環境による生活困難 | 2.97 | 0.44 |

表8 周囲の環境群の1要因分散分析

| Source | SS | df | MS | F | p |
|--------|---------|------|-------|-------|-------|
| 周囲の環境群 | 194.48 | 6 | 32.41 | 83.69 | 0.000 |
| 誤差 | 757.52 | 1956 | 0.39 | | |
| 全体 | 1398.27 | 2288 | | | |

(4) ひきこもり問題の性質

ひきこもり問題の性質についての質問項目においては、質問項目25「問題の複合性」の平均値3.81、質問項目26「悪循環状況の形成」の平均値3.50が高かった。下位尺度「ひきこもり問題の性質」の平均値は3.40であった(表9)。

また、周囲の環境の質問項目群について対応ありの1要因分散分析を実施した。結果は、 $F(2, 652) = 250.95$, $p < .001$ にて有意であった(表10)。

表9 ひきこもり問題の性質についての質問項目 (N=327)

| ひきこもり問題の性質についての質問項目 | 平均値 | 標準偏差 |
|---------------------|------|------|
| 質問項目24 支援者の負担感 | 2.90 | 0.80 |
| 質問項目25 問題の複合性 | 3.81 | 0.47 |
| 質問項目26 悪循環状況の形成 | 3.50 | 0.61 |
| 下位尺度 ひきこもり問題の性質 | 3.40 | 0.47 |

表10 ひきこもり問題の性質群の1要因分散分析

| Source | SS | df | MS | F | p |
|-------------|--------|-----|-------|--------|-------|
| ひきこもり問題の性質群 | 139.48 | 2 | 69.73 | 250.95 | 0.000 |
| 誤差 | 181.19 | 652 | 0.28 | | |
| 全体 | 539.76 | 980 | | | |

3. 下位尺度間の1要因分散分析

4つの下位尺度について対応ありの1要因分散分析を実施した。結果は、 $F(3, 978) = 210.05$, $p < .001$ で有意であった(表7)。

また図2グラフが示すように、「ひきこもり問題の性質」、「ひきこもり本人の生活困難」、「環境による生活困難」、「家族の生活困難」の順に平均

値が高く、ライオン法を用いて多重比較を行ったところ、4群尺度間いずれの比較においても有意であった ($p < .001$)。

表 11 下位尺度群の 1 要因分散分析

| Source | SS | df | MS | F | p |
|--------|--------|------|-------|--------|-------|
| 下位尺度群 | 136.17 | 3 | 45.39 | 210.05 | 0.000 |
| 誤差 | 211.33 | 978 | 0.22 | | |
| 全体 | 483.60 | 1307 | | | |

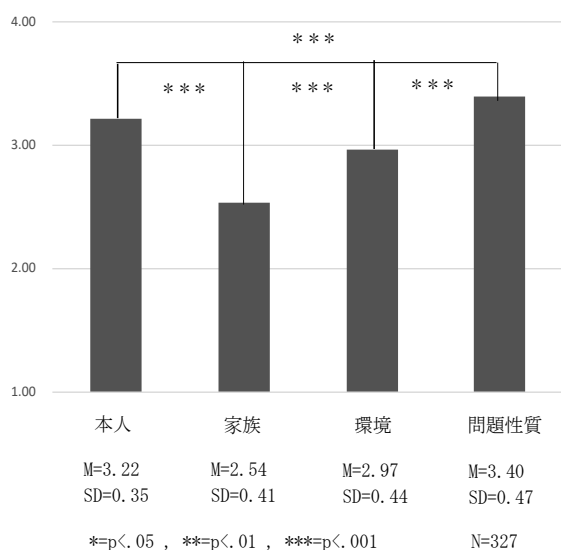


図 2 下位尺度群の平均値 (多重比較)

4. 質問項目間と下位尺度群間の相関係数

生活困難を測る 26 の質問項目間についてピアソンの相関係数にて検討したところ、比較的強い相関として、22「居場所支援の資源不足」及び 23「就労支援の資源不足」 $r = .539$ ($p < .001$)、さらに 25「問題の複合性」及び 26「悪循環状況の形成」 $r = .561$ ($p < .001$) 等があった (表 12)。

また、4つの下位尺度についてもピアソンの相関係数にて検討した。4群尺度間のいずれの相関関係においても有意であった ($p < .001$)。そのなかでも、「ひきこもり本人の生活困難」と「家族の生活困難」 $r = .378$ ($p < .001$)、また、「環境による生活困難」と「ひきこもり問題の性質」 $r = .364$

($p < .001$) 等に弱い相関があった (表 13)。

【考察】

1. 質問項目の記述的統計について

支援機関を対象とした全国的な質問紙調査によって、中高年齢期のひきこもり本人について 4「他者関係の困難」と 5「コミュニケーションの不器用さ」等の平均値が高く、相関係数も $r = .411$ ($p < .001$) にて比較的強い相関もみられ、全般的に対人関係の不得手さがあることが考えられた。また、周囲の環境として 22「居場所支援の資源不足」と 23「就労支援の資源不足」も平均値が高く、相関係数も $r = .539$ ($p < .001$) にて比較的強い相関もみられ、現状における社会資源の不足が明白になったと考えられる。

しかしながら、家族の生活困難については想定よりも回答分布や平均値が低かった。その理由として、所属機関や職種によって家族についての支援認識に相違があると考えられる。また、支援者の経験年数によって家族のアセスメントについても影響があるとも思われた。

さらに、ひきこもり問題の性質として 25「問題の複合性」や 26「悪循環状況の形成」についての平均値も高く、相関係数も $r = .561$ ($p < .001$) にて比較的強い相関もみられた。これまでの先行研究であまり触れられてこなかったひきこもり問題の性質についても、新たな量的データの知見として示すことができたと考える。

2. 下位尺度群間の量的関係について

下位尺度群間では、「ひきこもり問題の性質」の平均値 3.40 と「ひきこもり本人の生活困難」の平均値 3.22 が高く、「周囲の環境」についても平均値は 2.97 であった。また 1 要因分散分析、いずれ

の下位尺度間の多重比較においても統計学的に有意であった。

中高年齢期ひきこもりの要因として、ひきこもり本人の生活困難や周囲の環境の生活困難に加えて、その媒介性質として25「問題の複合性」や26「悪循環状況の形成」が作用していることが伺えた。先行研究として斎藤(1998:97-108)が指摘したひきこもりシステムにおけるコミュニケーション不全として、以上のようなひきこもり問題の性質が影響していることも考えられた。ひきこもりシステムは、それぞれのサブシステム相互の接点が失われストレスが助長されたものとして表現されるが、改めて生活困難としてのそれらの構造要因について示唆を得ることができた。

【研究の限界と課題】

本稿においては、生活困難という概念をとおして、量的に中高年齢期のひきこもりの形成要因についての一端について示した。

しかしながら、質問紙をとおした支援者の回答による量的分析であり、あくまでも中高年齢期のひきこもりにある人々の生活困難のひとつの側面を分析したに過ぎない。質的調査等による異なる視点からの生活困難の検討が課題となる。また、今回は記述的統計を中心にした報告であり、今後は多変量解析を用い分析についても取り組んでいきたい。

【謝辞】

ご多忙のなか、本調査にご協力頂きました全国のひきこもり地域支援センター、並びに生活困窮者自立相談支援機関の皆さまに心より感謝申し上げます。

また、2020年度明治安田こころの健康財団の研

究助成により、本調査の実施が叶いましたことに深くお礼申し上げます。

【注】

- 1) 個人が制度等との間に結ぶ社会関係に主体的(個人的)側面と客体的(制度的)側面という二重構造が存在することを明らかにした。この個人の主体的側面において、主観的に役割実行するうえで生じる生活困難を取り扱うことを社会福祉固有の対象領域と定義した。
- 2) 中高年齢期のひきこもりの操作的定義については、先行研究である「齊藤万比古・宇佐美政英・早川洋・ほか(2010)『ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン』2007-2009年厚生労働科学研究事業「思春期のひきこもりをもたらし精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究(主任研究者 齊藤万比古)」報告書」と「内閣府(2019)『生活状況に関する調査報告書』内閣府政策統括官(共生社会政策担当).」による定義を参考とした。
- 3) 本来システムの接点とは、相互性があるコミュニケーションを表しており、いわゆるひきこもり本人に対する家族の叱咤激励や社会からひきこもりを隠す抱え込み等の一方的なコミュニケーションではない。ひきこもりシステムは、それぞれのシステムがひきこもり問題に関して接点が失われていることを意味している。
- 4) 厚生労働省は、ひきこもり支援施策の中核機関として、ひきこもり地域支援センター(都道府県域)と自立支援相談機関(市町村域)を示している。

(https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/hikikomori/index.html, 2021. 7. 1)

【引用文献】

平塚良子 (2002) 「社会福祉援助活動の対象」米本秀仁・平塚良子他編『社会福祉援助技術論<上>』建帛社.

内閣府 (2016) 『若者の生活に関する調査報告書』(<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/h27/pdf-index.html>, 2021. 7. 1).

内閣府 (2019) 『生活状況に関する調査報告書』(<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/life/h30/pdf-index.html>, 2021. 7. 1).

岡村重夫 (1983) 『社会福祉原論』全国社会福祉協議会.

斎藤環 (1998) 『社会的ひきこもり 終わらない思春期』PHP 新書.

齊藤万比古・宇佐美政英・早川洋・ほか (2010) 『ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン』2007-2009 年厚生労働科学研究事業「思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究 (主任研究者 齊藤万比古)」報告書.

関水徹平 (2016) 『「ひきこもり」経験の社会学』左右社.

特定非営利法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会 (2017) 『長期高年齢化したひきこもり者とその家族への効果的な支援及び長期高年齢化に至るプロセス調査・研究事業』報告書, 厚生労働省平成 29 年度生活困窮者就労準備支援事業費等補助金社会福祉推進事業.

矢ヶ部陽一 (2019) 「長期・高年齢化傾向にあるひき

こもりの生活問題についての一考察—ソーシャルワーク実践の視点による検討—」『中九州短期大学論叢』第 41 巻 2 号, 61 - 75.

矢ヶ部陽一・滝口真 (2019) 「中高年齢のひきこもりに伴う生活困難に関する一考察—狭間概念による一事例の分析—」『西九州大学健康福祉学部紀要』第 48 巻, 1 - 7.

横浜市 (2018) 「横浜市子ども・若者実態調査 市民生活実態調査」(<https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashikosodate-kyoiku/ikusei/kyogikai/Jittaityousa.html>, 2021. 7. 1) .

表1 生活困難を測る26の質問項目と回答分布

単位：名（％）

| 質問項目 | 回答カテゴリー | | | |
|-----------------------|-----------|------------|-----------|-----------|
| | 全くあてはまらない | あまりあてはまらない | ややあてはまる | とてもあてはまる |
| 〔ひきこもり本人についての質問項目〕 | | | | |
| 質問項目1 気分感情の困難 | 3(0.9) | 49(15.0) | 165(50.5) | 110(33.6) |
| 質問項目2 体調維持の困難 | 9(2.8) | 84(25.7) | 167(51.1) | 67(20.5) |
| 質問項目3 家族関係の困難 | 8(2.4) | 21(6.4) | 135(41.3) | 163(49.8) |
| 質問項目4 他者関係の困難 | 2(0.6) | 15(4.6) | 96(29.4) | 214(65.4) |
| 質問項目5 コミュニケーションの不器用さ | 2(0.6) | 3(0.9) | 99(30.3) | 223(68.2) |
| 質問項目6 学校における挫折 | 5(1.5) | 37(11.3) | 163(49.8) | 122(37.3) |
| 質問項目7 職場における挫折 | 4(1.2) | 20(6.1) | 141(43.1) | 162(49.5) |
| 質問項目8 居場所がない感覚 | 3(0.9) | 101(30.6) | 159(48.9) | 64(19.6) |
| 質問項目9 変化を避ける気持ち | 8(2.4) | 102(31.2) | 165(50.5) | 52(15.9) |
| 質問項目10 漠然とした不安感 | 4(1.2) | 40(12.2) | 168(51.4) | 115(35.2) |
| 質問項目11 自己決定の難しさ | 3(0.9) | 49(15.0) | 160(48.9) | 115(35.2) |
| 〔家族についての質問項目〕 | | | | |
| 質問項目12 ひきこもることへの理解がない | 10(3.1) | 134(41.0) | 157(48.0) | 26(8.0) |
| 質問項目13 暴力等での本人への萎縮 | 69(21.1) | 110(33.6) | 125(38.2) | 23(7.0) |
| 質問項目14 支援者への協力がいない | 43(13.1) | 203(62.1) | 74(22.6) | 7(2.1) |
| 質問項目15 経済的な困難 | 15(4.6) | 67(20.5) | 187(57.2) | 58(17.7) |
| 質問項目16 家族自身の孤立 | 12(3.7) | 102(31.2) | 171(52.3) | 42(12.8) |
| 〔周囲の環境についての質問項目〕 | | | | |
| 質問項目17 支援機関への不信感 | 13(4.0) | 129(39.4) | 162(49.5) | 23(7.0) |
| 質問項目18 支援機関のひきこもり理解不足 | 9(2.8) | 135(41.3) | 152(46.5) | 31(9.5) |
| 質問項目19 支援機関相互の連携の難しさ | 15(4.6) | 92(28.1) | 183(56.0) | 37(11.3) |
| 質問項目20 アウトリーチ支援の不足 | 4(1.2) | 60(18.3) | 155(47.4) | 108(33.0) |
| 質問項目21 医療機関等の治療資源の不足 | 7(2.1) | 79(24.2) | 144(44.0) | 97(29.7) |
| 質問項目22 居場所支援の資源不足 | 4(1.2) | 34(10.4) | 137(41.9) | 152(46.5) |
| 質問項目23 就労支援の資源不足 | 6(1.8) | 37(11.3) | 129(39.4) | 155(47.4) |
| 〔ひきこもり問題の性質についての質問項目〕 | | | | |
| 質問項目24 支援者の負担感 | 15(4.6) | 77(23.5) | 161(49.2) | 74(22.6) |
| 質問項目25 問題の複合性 | 3(0.9) | 2(0.6) | 50(15.3) | 272(83.2) |
| 質問項目26 悪循環状況の形成 | 2(0.6) | 13(4.0) | 132(40.4) | 327(55.0) |

(N=327)

注：％は小数点以下第二を四捨五入したため、100%とならない場合がある。

質問項目12と14は、逆転項目である。

表 12 比較的強い相関係数がみられた質問項目間

| 比較的強い相関がある質問項目 | ピアソンの相関係数r |
|---------------------------------------|------------|
| 1「気分感情の困難」及び2「体調維持の困難」 | .423*** |
| 2「家族関係の困難」及び13「暴力等での本人への萎縮」 | .430*** |
| 4「他者関係の困難」及び5「コミュニケーションの不器用さ」 | .411*** |
| 15「経済的な困難」及び16「家族自身の孤立」 | .456*** |
| 18「支援機関のひきこもり理解不足」及び19「支援機関相互の連携の難しさ」 | .472*** |
| 22「居場所支援の資源不足」及び23「就労支援の資源不足」 | .539*** |
| 25「問題の複合性」及び26「悪循環状況の形成」 | .561*** |

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

N=327

注) ピアソンの相関係数rは、0.4以上をもって比較的強い相関があるとみなした。

表 13 下位尺度群の相関係数

| | ひきこもり本人の生活困難 | 家族の生活困難 | 環境の困難 | ひきこもり問題の性質 |
|--------------|--------------|---------|---------|------------|
| ひきこもり本人の生活困難 | — | .378*** | .285*** | .250*** |
| 家族の生活困難 | | — | .237*** | .235*** |
| 環境による生活困難 | | | — | .364*** |
| ひきこもり問題の性質 | | | | — |

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

N=327